岡崎市特殊教育推進協議会・昭和59年７月　日発行
（題字　福岡中１年）

子どもと親を見つめて

特殊教育部長
伊沢　昭

二階の校長室から毎日きめられた時間眺める忘れ得ない一場面がある。さくら学級のM君と母親の登校である。

M君は、肥満の三年児童である。心身の障害のため毎日一時間遅れて母親と一緒に登校し、一時間早めに下校する。親子手を睦まじく握り合い、話し、笑いながら登校してくる。手を振ると、大きく手で合図を返してくる。明るく屈託がない。文字通り、親子が一つになっている。子どものため本当によく頑張って登校する。

「子どもが、学校が好きですから。」と、いつも明るく我が子のことを話される。頭のさがる思いでいっぱいである。親と子が手を取り合い、思いやっての毎日の生活。親の気持ちが、胸に迫ってくる。『愛情』の一語に支えられての親の強い子への姿勢であると、身が引きしまる思いがする。

特殊学級の親たちと話したり、行動をともにする機会がよくある。どの親もみんな同じように非常に熱心であり、意欲的で、協力的である。そして、我が子の障害については、何とかならないものかと強い希望を持って勉強もされる。私どもの方が教えられることが少なくない。

特殊学級の先生方もM君の母親のような気持ちで、毎日取り組んでおられる。この子のために何とかしてやろうの気持ちでいっぱいである。親と教師が手を取りあい、子どもたちのために、特殊学級の先生だけでなく、全職員一丸となって、M君の母親のような気持ちを持って進みたい。教育の実践に、教師も切実な親の気持ちに負けないで、それ以上の情熱と愛情で取り組んでいきたいと最近思うこと切なものがある。

作業学習を通しての花だんづくり

根石小特殊学級

「緑いっぱい、夢ある学校づくり」を合い言葉に緑を育て、緑を守り、勤労の楽しさを味わわせる活動を推進している本校の中で、特殊学級も例外ではない。

五年前、作業学習の一環として花つくりをとり入れた。

当初は、子ども達も関心が薄く、指導者の指示に従い花だんの除草、散水等を細々と行っていた。除草では、花の苗を雑草と間違えて抜いてしまったり、花だんの中に入って花を踏みにじりながら散水する等意識のない作業状況であった。

しかし、花が咲く頃になって、花と草とは葉っぱが違う、足でふまれたところは花の大きさが違う、草丈が曲っている等、子ども達なりに気づいたようである。

現在では、花だんを見て「先生きれいだね」「水をやったもんね」「草もとったよ」といった発言がとび出し、満足感がうかがえるようになってきた。

本校の特殊学級では、指導の方針として、

(1) 落ち着いて一つのことに根気強さをもってとりくめるようにする。

(2) 作業を通して、からだ全体の動き、特に腕の力や手指の力をつける。

(3) 花だん作業をすることにより、きれいな花が咲いた時の喜びを味わわせ、情緒の安定をはかる。

の三点にしぼり指導実践した。

指導の形態として、作業学習を週三時間特設し、精薄学級四名、情障学級四名で学校花だん作業を行っている。

指導実践の例を一、二紹介する。

(1) 一輪車やスコップの使用になれさせる。

作業の効率化をねらうと同時に、平衡感覚を養ったり、腕の力をつけるため一輪車を使用させた。土を入れたり、プランターや植木鉢を作業場まで運ぶ。

土運びでは、土を入れてもらって運ぶのではなくスコップで自分がすくって入れる。扱い方のできない子には、手をとって指導したり、うまくできる子の作業状況を見せるなどして覚えさせた。土入れ競争などをさせ刺激を与えることもさせている。

(2) 鉢飾り

世話をした鉢花を、校長室や玄関などへ持って行き、飾るのも学級児達の楽しみの一つである。誉められることを喜ぶ子ども達なので、先生方に声がけをされ満足感を味わっている。

○ 学習活動から思うこと

いろいろな作業過程の中で、出来ないからさせないのでなく一人ひとりに目標を持たせ、身体を通して学ぶ作業学習こそこの子達に最適である。

自ら学ぶ 子どもから学ぶ

小東矢 横井吉明

国際障害者年ということで人びとの意識が障害児や障害者に向いているが、そのせいか障害児教育こそ教育の原点だという言葉をよく耳にする。それは、障害児というもっともいい指導者が、教師のまわりに常にいるのであるから、こんなに鍛えられることはないといえる。これほどいい教師になるチャンスをもっている教師はないと言っても過言ではない。下手な教え方をしようものなら、彼らは乗ってこないし、よそを向いてしまう。まかり間違えば教室を飛び出して行ってしまうことになりかねない。

だから教師は必死になって自分を鍛えざるを得ない。すばらしい実践者は常に「子どもに学ぶ」ことを忘れない。子どもを教えることは子どもから学ぶことであると悟る。子どもたちから学びとることのできない教師は、子どもを教えることもできないというのである。このことは健常児の指導においても障害児の指導においても同じように考えることができる。

どんなに反応の乏しい障害児でも私たちがいろいろな手探りをしながら関わっていくことでまちがいなく発達していく事実を見ることができる。ところがその一方、障害児学級の中でいくらがんばってもなかなかのりこえられない壁があったのも事実である。走ることにしろ絵を描くことにしろ、あるいはもっと日常的な生活のリズム、整列、準備やあと片づけ、勉強する構え等、この状況の中でいま自分は何をしなければならないかという判断や、自分もやってみようという意欲などは、障害児ばかりの集団ではなかなか現れてこない。しかし、私たちは、その可能性を信じ、あきらめることなく努力を続けなければならないと思う。

子どもの作品

国語なんてきえろ
一時間の国語のじかん
ぼくは心の中で
国語なんてきえろ
といった

先生が
たのま
といった
ぼくはぎくっとした

ぼくは本をよんだ
先生に
なんでまちがってる
とおこられた……
ぼくはショックで
もう国語なんかいなくなれ！
といった

ぼくはあたまがいたくなって
血がのぼりそうになった

（岡崎小　六年）

遠足に明治村で乗った汽車を描きました。
きれいな色で楽しい様子が描けています。
（岩津中二年）

部活の時間卓球をしているところです。
大きく画面いっぱいに描けました。
（岩津中一年）

精神遅滞と精神薄弱を考える

岡田病院副院長
井上恭夫

三月の臨床精神医学誌に精神遅滞を特集している。私もよく使う言葉である。米国の精神薄弱学会では精神遅滞と言う言葉が適当であるとして定義づけしている。

一、発育期中に出現すること。
二、知的機能が平均値より明かに低いこと。
三、適応行動が障害をもっていること。

この三条件の合致したものを言うとしている。

文部省の見解では、

一、原因があって精神発育が遅れており、知的発達の遅れだけではない。
二、社会適応が困難な位精神活動が未分化であること。
三、精神発育遅滞は三段階に分けられ、軽度は日常生活に差し支えない程度に身辺処理が出来るが抽象的思考は困難である程度のもの。

状をそのまま表すものであり、予後を規定しているものではないとし、精神薄弱と概念成立の基盤を異にすると東海大精神科学教室では説明している。この為精神遅滞の広い概念の中に精神薄弱は含まとしている。又精神薄弱は脳機能の障害の為先天的又は出生間もなく障害をうけその結果知能の障害が存続し改善されがたい予後をもっているものであるとしている。

精神遅滞は、現時点の行動の現である事に由来すると言う。多くの遅滞児は言語表出のおくれであるとし、視聴覚障害、肢体不自由よりはるかに遅れる。発見されてもどの程度に発育し、或いは学習等刺激が効果的であるかは今後の努力にまつ事であるとも言う。

子供を障害児と言う前に発育途上にあるひとりの子として考える視点を失はない様にしたい。医療・福祉・教育の連係が大切であると思う。子供が仲間を得て人として認識を持ちはじめるまでには大変な努力と援助が必要である。

（岡崎市就学指導委員）

れることになり、知的発育が可能とされる年齢値を考慮してよいと思う。東京児童相談センターの上出氏は精神遅滞の早期発見、早期療育は満足すべき状態ではなく、障害の発見そのものが著しく困難

学級スナップ

健聴児とともに
― 遠　足 ―

児童の日記より
六名小

学校へ行って8時25分になったらトイレへ行った。つぎに、うんどう場へならんだ。ぼくは大門町の水郷公園は、とても遠いかなと思った。

小山君とならんで歩いた。遠かったので足がつかれた。少しせきが出るし、それに足を虫にさされて赤くはれて痛かった。

水郷公園についたらぼくはよかったと思った。

おべんとうがはじまったので馬込君といっしょに食べた。せっかくお母さんが作ってくれたけど、ぜんぶ食べれなかった。

大山康夫先生と十三人の仲間たち

六ッ美中　蜂須賀　千代子

「大山先生」と呼んでも答えてくれない。先生は健康の為にと、一日十粒の落花生を食べるといいよと、そっと手のひらにのせてくれました。あの感触は昨日のように思い出されます。

小学校の教科書をひもとき、一人ひとりに合った教科書を作成し授業を進められました。本を読むことが得意でない生徒にはどのように意欲づけをしたらよいか考え、活字印刷を始められました。大山先生が印刷された一枚の大山康夫の名刺を見て、自分の名前の活字を拾うその目はらんらんと輝いていました。「あった」と言っては身体ごとで喜びを表す姿に、今までになかった意欲の大きさに感激しました。各自に名刺も出来上り、先生方に一枚ずつ配布する得意そうな顔、先生のも作ってあげるねとにっこり笑っている子。面到くさいという生徒に、完成の喜びを味わせたいと一緒になって、一字一字拾った活字に、なつかしさを覚えます。

たんじょう会

授業風景

十月から活字ひろいを始めて、十一月に作った年賀状の一枚一枚にそっと頬をあてるSさん、注文取りのT君等教室は熱気に満ちていました。でも教室から一歩出ると、人が違ったように無口になる生徒でした。どうしたら発刺として、心身共に健全な生徒に育成することができるだろうかと話し合った事もたびたびでした。

特殊学級のある学校が少なく、他学区からの生徒が三名おり、国鉄岡崎駅まで毎日の送りとどけ、バスの運転手さんに「○○でおろして下さいね」と定期券を見せお願いすると「はい」と気持よく、ひき受けて下さる好意に、生徒も元気づけられました。でも待合室での人の目には厳しいものがあり本人たちには訓練の場でもありました。発音・声の大きさ等、口うつしで教えました。そんなMさんも今は家の店番をしています。

その後S君は左官になり、三年前私が六中に転任した時の体育大会に尋ねてくれました。口数は少ないけど「先生」と呼ばれ、成長のはやさにびっくりしました。T君は自動車整備の仕事に、中学卒業と同時に就職したA君は入社後よく働き、上司にかわいがられ、十数年勤務しています。Nさんは T君と同じ会社に勤務しましたが気持よく、素直に働く姿を認められ、今はよき妻であり、よき母であります。そんな知らせを聞く度に、特殊学級の推進者であった、大山先生に敬意を表すると共に、御冥福を祈るものです。

昭和五十九年度

岡崎市就学指導委員会

▼委員と活動▲

・井上　恭夫氏　岡田病院副院長
・杉浦　寿康氏　小児科医　能見
・池田　勝昭氏　愛教大助教授
・山本　実　氏　市福祉部々長
・安藤　豊　氏　岡崎児童相談所
・鈴木　拓郎氏　岡崎養護学校長
・丹羽　辰夫氏　安城養護学校長
・山崎　正虎氏　岡崎盲学校長
・富田　守雄氏　岡崎聾学校長
・伊沢　昭　氏　矢東小学校長
・林　勝己氏　大門小学校長
・太田　清美氏　市教委指導部長

五月　特殊学校見学会　三校
六月　就学指導説明会
七月　児童実態調査
　　教育相談会
九月　障害児調査報告書作成
十月　教育相談会　八回
十一月　就学指導委員会　四回
在学児の就学指導もおこないます。

昭和五十九年度

親子の集い

本年度も昨年度に引き続き「運動会」を計画しています。

一、期日　九月十七日（月）
一、会場　岡崎市体育館

問い直し、問い続ける教師

情緒障害児教育研究部
梅園小　後藤　君平

「指示することなら素人でもできる。（大村はま）」

一般に教育の出発点は、子供のもつ自発性をそこなわないようにして、その発達する力を十分に生かせるように支援をすることではないかと思うが、情緒障害児ことに自閉症児の学習活動化への苦しみは大きい。彼等は「極度な孤立性（対人接触の障害）」や「同一性保持の要求」などが強く、近代的教育とは全く逆の方向にこだわりを示している。そして、その改善には教育しかないといわれる。

私たちは、ペスタロッチの開発主義に似た気概でとりくんできたものの、まだまだ特殊教育そのものの大きな構造をもつことができたであろうか。愛と努力と人格があれば教育には奇跡が期待できるということもうなずけるが、やはり構造主義の時代に迫るような実践をするためには、問い直し、問いつめ、問い正すひらめきと勇気のある教師になりたいものである。この研究が大きな環になることを願って……。